

福島県県南農林事務所よりジュンサイのプロフィール及び栽培に関する報告がありました。

かつては南湖でも採れたジュンサイの復活に向けた最初の一歩です。植物が相手なだけに早急な成果は期待できないかも知れませんが、近い将来、南湖でジュンサイが採れる日の来ることに、みんなで思いを馳せました。

ジュンサイのプロフィール

ジュンサイ（スイレン科）は池や沼、ため池の水深 1～3m くらいの水域に群生する多年生水草です。

漢字では「蓴菜」と書き、古くは万葉集にも登場しています。

生育地は広く、日本では北海道から九州まで、さらに朝鮮半島、中国、東南アジア、インド、オーストラリア、北アメリカ、西アフリカに分布していますが、食材として利用しているのは中国と日本だけだそうです。



水面を覆うジュンサイの葉



ジュンサイの花



食用する部分（若芽）

ジュンサイの生態

水質：富栄養化されていない「**腐植栄養型**」の水質を好む。
PH は 4～5 付近の酸性

水温：10 程度から葉・茎の生長が始まり、**15 以上で生育は旺盛**となり、**25 くらいまでが生育の適温**。
30 を超えると高温障害を受けやすい。

南湖の pH は
8～9

野菜としてのジュンサイ

ジュンサイの主な産地は東北で、そのうち秋田県での生産が全国の約 9 割を占めています。もともと自生していたものを採取していましたが、近年、自然環境の変化に伴う水質の悪化で生育地が減少し、代わって水田を利用したジュンサイ田での栽培が行われるようになりました。近隣では北塩原村で栽培されていますが、夏は水温上昇を抑えるための水交換と手取りでの除草、冬は水をためて根の凍結を防止するなど、管理にはかなりの労力が必要です。

今後の予定

現在、出来るだけ早い時期に、白河市内のため池等で栽培試験に着手できるよう調整中です。
順調にいけば 3 年目に南湖で試験栽培を行えるかも知れません。お楽しみに！！



福島県県南農林事務所農業普及部



本年度 4 回にわたり日本大学において実施された南湖の水質調査の報告が長林教授よりありました。

長林教授によれば、今年 8 月まで調査を行えば、丸 1 年のサイクルがつかめるので、効果的な保全対策のための基礎資料がまとまることでした。

南湖公園の中核である南湖の湖水の水質は、公園の保全・活用における大きな役割を担うものです。今年度は多くの市民グループの参加があり、ワークショップのひとつの成果と言えます。

来年度も引き続き実施され、さらに多くの市民、特に南湖の近隣住民や小学生などの参加が望まれるところです。

水質分析項目のまとめ

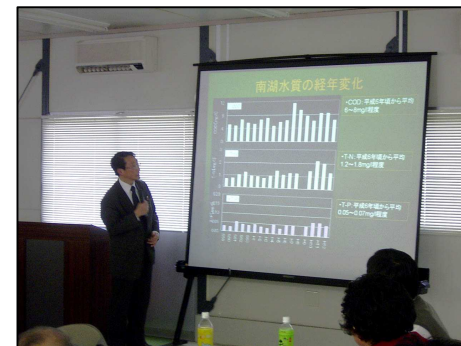
- ・水深は 1 m 程度
- ・底泥深は 50 cm から 1 m 程度
- ・湖の滞留時間は非灌漑期で約 100 日、灌漑期で約 20 日
- ・谷津田川から南湖流入までの間に水田区間で浄化が認められる
- ・湖の COD は流入水質と同程度（有機汚濁）
- ・滞留時間が長い場合、ちっ素、リンは流入水質の半分程度の濃度
- ・池干し後はほぼ流入河川と同程度の水質

日本大学工学部 長林教授



南湖の水質特性のまとめ

- ・夏期に緩い水温成層が形成し、湖底部で溶存酸素の低下
- ・夏期に湖心部表層で有機汚濁による溶存酸素の低下
- ・ちっ素、リンの流入による藻類の増加と底泥の巻き上げによる藻類の増加
- ・滞留時間が長い場合、底泥からの物質溶出や沈降の過程を含む物質循環が関与



望ましい水環境に向けて

